

春日部福音自由教会 2020年9月13日 11:00 敬老礼拝（同時配信オンライン合同礼拝）

聖書 旧約聖書 詩篇 23 篇 1 節～6 節

説教 「終わらないいのちの希望」小野信一牧師

## I 序

おはようございます。敬老礼拝によろこびにおいでくださいました。今この中央会堂に、またオンライン同時配信によって、丘の上会堂、また庄和会堂に集まって参加して下さっている方達がおられます。そしてそれぞれ各家庭においてもこの礼拝に参加して下さっている方たちがいらっしゃいます。もしご家族で親子と一緒に、また子供たちや中高生の祖父母の方たちと一緒に家で参加して下さっている方があれば、その方たちのことも覚えて今日はともに御言葉に耳を傾けてまいりたいと思っております。

お祈りをささげましょう。

天の父なる神様。今日は敬老礼拝の日です。私たちの人生の先輩であり、私たちの父親母親である方たち、また祖父祖母である方たちと共に礼拝をささげたいと願って今日の日を迎えました。昨年のようにみんなで一緒に集まるということができませんが、今、三会堂において、またそれぞれの家庭において、この礼拝に加わっている一人一人と、一つ一つの家族をあなたが祝福してください。

いま御言葉が朗読されました。詩篇 23 篇のみことばをもって私たちにお語りください。イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。

## II 愛する姉妹を天に送って

司会者からもお話がありましたように、9月6日、先週の日曜日の夕方、宇田川信子姉妹が天に召されました。地上の生涯を終えた、ということになります。そして9月10日に告別式を行い、教会の皆さんも、ご友人の方達も、もっと沢山その場に行きたいと思う方いらっしゃったと思いますけれども、限られた人数でその式を行いました。また同日火葬が行われました。これまでこの地上に生きていた体、肉体は役目を終えたということになります。しかし「信子さんのいのち、たましい、その存在、人格は体を離れて、体を脱いで主のみもとに今あるのだ」という希望が私たちにはあります。創造者である神様の近くに呼ばれて招かれて今安らいでいる、それが私たちの希望です。体のいのちは限りがあります。眠る時が来る。しかしまた復活の日、目覚める日が来るのです。

同じ9月6日にアルフォンス・デーケン神父が天に帰られたという知らせを聞きました。同じ日には驚きました。今ここに一冊の本を持ってきましたけど、『よく生き よく笑い よき死と出会う』という本です。日本の国において、上智大学の先生でしたけれども、“死生学”、生と死を考える学問を広めてくれた先生でした。そのデーケン先生の葬儀ミサを YouTube で見ることができました。冒頭のところで、「キリストが十字架で死に よみがえったように、亡くなった人もキリストと共によみがえる」という希望が語られていました。

### Ⅲ 一緒に食べる、一緒に歌う

今日の敬老礼拝で、本来したいこと、したかったことは何かと言いますとですね、2018年の敬老の集いの時にお話ししたものを振り返ってみて改めて気がついたのですが、それは「一緒に食べる」ってことです。いつもお食事を用意して、一緒にいただいて、お話ししながら食べるっていうことをしていたわけです。またもう一つは「一緒に歌う」っていうことでした。一緒に賛美歌を歌い、また一緒に唱歌や童謡やいろんな歌を歌って、敬老の集いを行ってきたのです。

今年は思わぬことになってですね、それができない。今日はそれをしないことにしました。お食事がなしです。午後のプログラムも残念ながらなしです。本当に今年は思わぬことが色々あったと思います。今ここに、三つの礼拝堂に来られている方も、それぞれご家庭にいらっしゃる方も、この一年をあるいはこの半年を振り返って、どんな半年一年だったでしょうか。色んなことがあったと思います。どんな大変なことがあったでしょうか。これは私たちが共通して通ってきた大変さであったということができるとし、またその中で、みんなが大変ななか、自分の人生に起こった変化、自分の家族に起こった変化などなどがあったのじゃないかと思います。どんな大変なことがあったでしょう。またその中でどんな思いだったでしょうか。この半年を振り返ってみて、できればこの後、身近な人と語り合ってみていただきたい、話し合っ、聞き合っ、聞いてみたいと思います。この礼拝堂に来られた方も、家庭にいる方も、そういう時を持っていただければと思います。また反対に、この大変な半年、一年の中で、どんな嬉しいことがあったでしょうか。感謝も数えてですね、やっていきたいと思います。大変だったことばかり、つい考えてしまうわけですけど、でもその中にこういう感謝があったな、嬉しいことがあった、誰かから慰められた、励まされた、、、どんなことがあったでしょうか。それも思い起こし話し合っ、聞き合っ、聞いてみたいと思います。

今年はこの礼拝の後食事がありません。午後のプログラムもなしです。残念で寂しい思いがします。でもこれからまたですね、来年はどうなるか今見えませんが、何か新しい方法を見つけていきたいと思っています。一緒に食べることってとても大事です。人が一緒にいて一緒に食べる、一緒に話す。今はマスクを取って食べる時間と、それから話すときはマスクをつけて話すみたいな、食べる時間と話す時間を分けることをしようしたり、色々しています。

一緒に歌うことも、とても大切なことです。今日も歌を少ししか歌わないようにしています。これから大切なことを大切にするためのどんな方法があるか、見つけていきたいと思っています。今日はそれぞれの場でできる形で、感謝と敬意を表す日としていきましょう。そして皆さんとともに神様がくださるいのちの言葉を共有し、また届ける日としたいと思っています。

### Ⅳ 詩篇 23 篇

今日は旧約聖書の詩篇 23 篇を朗読していただきました。“主は私の羊飼い”とダビデが歌った賛美の歌です。私の聖書に一枚のハガキが挟まれていて、これずっと持っていたのですが、（あの後ろの方

の席やカメラ越しの方は多分よく見えないと思います)、羊と羊飼いの絵、ミレーが書いた“夕暮れに羊を連れ帰る羊飼い”という絵の絵葉書です。これ、信子姉からいただいたのですね。“2018年2月10日に伊奈県立がんセンターにお見舞いに行った際に頂いた”っていう風に書いてあります。信子さんには、“これからもお祈りしてくださいね”ってお願いをして、先週の金曜日に最後に会話をしたのが地上で会った最後になりました。

この詩篇 23 篇は、聖書の中でも最も有名な言葉のひとつ、150 ある詩篇の歌のうちでも最も有名なもののひとつです。ダビデ王による歌です。羊飼いであったダビデ、また豎琴を奏でて歌を作って詩を作って歌ったダビデ、そして王になった男、その歌です。

今日は人の生と死、そしてその向こうにある希望について、この御言葉を心に刻みたいと思います。この有名な詩篇からいろんな歌が作られています。皆さんご存知の歌あるでしょうか。例えば思い出すのはですね、映画『戦場のメリー・クリスマス』で、坂本龍一さんとか、ビートたけしさんとか、デビッド・ボウイさんが出ていた映画なんですけど、たしかデビッド・ボウイの死の場面だったように思うのですが、英国兵士たちがその死の場面で歌ったのが、この詩篇 23 篇でした。私、多分その時中学生ぐらいで、1980 年代だったと思うのですが、映画を見た後に探して、その頃はインターネットとかないので何か索引か何かで探して、讃美歌第二編にその歌を見つけました。“The LORD is my shepherd, I shall not want” という歌で、今日最後に歌う讃美歌がその歌です。いま新聖歌にも入っています。「主は私の羊飼い。私は乏しいことはありません」。

もうひとつの歌があって、レーナ・マリアさんが歌っていた詩篇 23 篇の歌がありました。“The LORD is my shepherd, I have everything I need”、私は乏しいことがない、何も足りないものがないっていうのを“I have everything I need”とレーナ・マリアさんが歌っていたのです。レーナ・マリアさんは身体に障害を持っていましたけれども、水泳の選手でもありました。そして歌手、ミュージシャン、アーティストでもありました。生まれつき両足がなく、片手を持たないその人が“I have Everything I Need. 私は私が必要な全てを持っている”って歌っていたのです。すごいなーって思いました。すごい歌だな、すごい人だな、って思いました。そしてレーナ・マリアさんに、「私は必要な全てを持っている、だから安心している」と歌を歌わせてくださる神様って、すごい神様だなと思いました。ダビデは歌います。「主は私の羊飼い、私には欠けることがない」。神様がダビデに言ってくださるのです。「わたしがあなたの羊飼いだ、わたしがあなたを見守っている、わたしがあなたの必要なものはすべて知っている、すべて与える」と言ってくださる。そのように神様は、私たち一人一人にも同じように語ってくださるお方です。

2 節、「主は私を緑の牧場に伏させ、いこいのみぎわに伴われます」。羊は安心しないと横にならないそうです。緑の牧場に、そして水を飲むことのできる水の水際に、羊飼いが連れて行ってくれる。羊は安心して横になります。そこには信頼がある。「信じて大丈夫なのだ、この方を、私の羊飼いを信じ

て大丈夫なのだ」という安心感、「任せて良いのだ」という平安があるのです。

この半年振り返ると、いろいろ大変なことがありました。でもその中で、「わたしがあなたを見ているよ」と言ってくださる神様がおられる。私たちは信頼したいと思います。信頼しましょう。

3節でダビデは歌いました。「主は私のたましいを生き返らせ、御名のゆえに、私を義の道に導かれます」。

心が元気を失う時があります。それを生き返らせてくださる、リフレッシュさせてくださる、倒れた時にもう一度立ち上がらせてくださる。私たちにはそういう羊飼いがおられる。「疲れちゃったなあ、これからどうなるのかな、もうわからないな、不安だ、もういやだな」って思うようなとき、元気を失うとき、心が元気を失いたましいが濁ってしまうとき、羊飼いがたましいを生き返らせてくださいます。そして義の道に導いてくださる。“義の道”っていうのは「正しい道」です。どういう意味なのだろうと考えて、これは「歩むべき道」っていうことかな、と思いました。“義の道”っていうのは、間違いのない道とか、問題のない道とか、そういうことではないように思います。

人生のなかで、この羊飼いであるイエス様とともに歩んだら、何の間違いもしないとか、何の問題も起こらない、ということではないでしょう。でも「行くべき道」を行くのです。

4節。4節は5行ありますね。「たとえ死の陰の谷を歩むとしても 私はわざわざいを恐れませんが」。導かれて歩くのです。羊飼いが導いてくださって、行くべき道を歩くのです。その導かれつつある中で、死の陰の谷を歩くことがある。この“死の陰の谷”っていうのは色んな風にとれるでしょう。

それはひとつには日の当たらない暗い谷、ジメジメした暗い谷を、光が届かない所を歩いていかなければならない、ということがあったかもしれません。その谷を登っていくとその上の方に、より良い牧草地がある。開けた地があって、光が届く、そして緑の草がある、より良い牧草地がある。季節ごとに牧草地を移動するために、羊飼いが導く暗い道を通らなければならないことがあるというのです。

また死の影の道、谷というのは私たちの人生の終わり、文字通りの死、この肉体のいのち、このいのちの終わりのことを指すということもあるでしょう。死の影の谷は通って通り抜けるべき道です。そこは行き先ではありません。人生の終わりどこに行くのですか？それは死の陰の谷です、死が行き先です、と思うかもしれない。でもそうではないのです。そこは「通って通り抜けるべき道」なのです。その先に行くべきところがある。死の影の谷は行き先ではなく、デスティネーションではなく、“経由地”です。そこを通ってもっと高い所に、より良い牧草地があるのです。より高い所に行くべき、そこに行くために“死という門”を通るのです、通って行くのです。死の影を通ったことがあるわが羊飼ひ、私たちの羊飼ひイエス様が、私たちが人生の途上で暗い道を通るとき、苦しいところを通るとき、私たちが人生の終わりに死の門を通るとき、そこを通ったことのあるイエス様が一緒に歩いて導いて下さいます。

ダビデは言いました。「私は恐れない、わざわざいを恐れない」。この“わざわざい”という字はここでひらがなになっています。災害の“災”と書いたり、今コロナ禍って言う“禍”っていう字、それもわざわざい

ですけれども、英語で evil と言ったり、わざわざですね。ダビデは恐れなと言いました。

なぜ「恐れな」と言えるのでしょうか。「あなたが共におられますから」。ダビデは知っていました。「主よ、わが羊飼ひよ、あなたが共におられます。一番歩きづらい道、一番困難な道、一番通りたくない道、そこに行くとき、あなたが共におられます。私の羊飼ひが共に歩んでくださっている、だから恐れな」。ダビデはそう言うことができました。私たちの羊飼ひであるお方が、ダビデにも私たちにも言ってくださいます。「わたしがあなたと共にいる。地上でもどの道でもわたしがいる。あなたが世を去るときも、わたしが共にいる」。そのように言ってくださるのです。

「あなたのむちとあなたの杖それが私の慰めです」。むちと杖は羊飼ひの持つ道具です。この絵にも、手に持っている杖が描かれています。羊飼ひはむちや杖を使って羊を導いたり矯正したりします。道を誤った時に角を引っ掛けて戻す、正しい道に引き戻す、という風にも言われます。あるいは羊の体の脇腹の毛を掻き分けて体の異常の検査をする。時に、むちと杖は敵を倒す武器になります。私の羊飼ひである方が私を矯正し正してくださる。体に病気や傷がないか見守り点検してくれる。悪意が迫る、危険が迫るとき、見逃さずに対処してくれる、だから安心だ、だから満ち足りている、ということができるのです。

5節はこうです。「私の敵をよそにあなたは私の前に食卓を整え、頭に香油を注いでくださいます」。敵が現れるときがあるのです。どんな敵がいたとしても敵の姿が見えたとしても、私の羊飼ひが見てくれるならば安心する。危険が迫るとき、敵が迫るとき、悪意を持つ人や害を加える人がいるとき、でもそれよりも近くに羊飼ひがいてくださる。私の前に食卓を整え、もてなし、ふるまいを用意してくださる。私の造り主が、私の救い主が、私の導き手が、どんな敵よりも近くにいて見ていてくださる。祝福の油を注いでくださる。私を、高価な油を注ぐ、価値のあるものと認めてくださる。祝福を惜しまず、頭から全身に流れるほどに豊かな祝福を注いでくださる。私たちはダビデとともに告白することができます。

最後の6節です。「まことに私のいのちの日の限りいつくしみと恵みが私を追って来るでしょう。私はいつまでも主の家に住みます」。いのちって何でしょうか。聖書では少なくとも二つの意味で「いのち」ということが言われています。

ひとつは体のいのちですね。いま私たちが持っている、今日も心臓が動き、今日階段を上ってこの礼拝堂に来たこの体、いま私たちがお互いに見ることができる体です。この体のいのちこれは有限です。私たちのいのちはいつか終わります。限りあるいのちです。肉のいのち、限りあるいのち、限りあるからこそ大切に扱うべき、大切にすべき、大切に生きるべきいのちです。

もうひとつのいのちがあります。それは体のうちに生きているのですけれども、時が来たら体を脱ぎ捨てて、体を離れて住むようになるいのちのことです。その人そのもの、たましいです。たましいのいのち、それは肉体の限界によって終わることのないいのちです。終わらないいのち、限りないいのちが

あるのです。私たちにはそのように二つのいのちがある。体のいのちとたましいのいのち、限りあるいのちと限りないいのちがあります。それが私たちの希望です。終わらないいのちがあるという希望です。止むことのない希望、潰えることのない希望です。揺るがない。今は希望があるけどいつか終わってしまう、というようなものではありません。

いつかなくなってしまういろんなものがありますね、というかほとんどのものはいつかなくなってしまう、でもそれとは違う希望です。なくなる希望。私たちのいのちは預かり物です。いのちは繋がっているものです。神様と繋がり、そしていのちは親と繋がって父親母親からもらったいのち、そしてその親、祖父母からもらった、またそのさらにまたその親、先祖の人たちからもらっているいのちです。繋がっているいのちです。私たちには限りあるいのちがあります。この体の限りあるいのち、大切に生きましょう。そして終わらないいのちの希望があります。信じましょう。いのちは預かり物です。造り主なる神のものであり、そしてあなたのものです。いのちは神様のものであって、そしてあなたのものです。預かっているものです。神様から預けられ任された、大切なたったひとつのいのちをこの地上にある間、限られた時間精一杯生きましょう。神様と繋がり、家族と繋がり、お互いと繋がっていることを感謝しましょう。そこに、一緒にいる所に、繋がっているところに、いのちの祝福があります。そして預かっている間精一杯生きます。でもそれは有限の時なので終わりが来ます。その預かっている時の終わりが来たら、神様にそれをお返しします。

伝道者の書の 12 章の 7 節というところにこういう言葉があります。「土のちりは元あったように地に帰り、霊はこれを与えた神に帰る」。人間は、最初の間人アダムは、土の塵から作られて、神様の霊が、神の息が鼻から吹き入れられて、霊的な生き物になりました。ですから私たちのこの体は、このいのちは、体の部分は元あった地に帰る。そして霊は、それをくださった神に帰るのだって言うのです。ちりは元の大地に帰り、霊は与え主である神に帰る、ということです。

ダビデは歌いました。「いつくしみと恵みとが私を追って来る。私はいつまでも主の家に住みましょう」。神様の慈しみ、あわれみやめぐみ、これは神様の真実の愛ということです。神様の真実で変わらない愛、永遠の愛です。神様のあわれみ、小さなものをあわれみ弱いものをあわれみ、死んで行くべきいのちをあわれんでくださる、神様のあわれみ慈しみ、その慈しみと恵み。

それは新約聖書ではヨハネの 1 章で“恵みとまこと”という風に言われていますけれども、今日交読した詩篇の 136 篇は、「その恵みはとこしえまで」っていうことを繰り返し繰り返し歌う歌です。あんまり長く声を出さないほうがいいかなと思っているので、短く交読しましたけれども、繰り返し「その恵みはとこしえまで」と歌います。

詩篇 23 篇に関わる歌で、最近の賛美で “Your Goodness is running after me” という歌がありました。あなたの恵みはあなたの慈しみは、running after me、私の後から走ってくる、後ろをついてくる、

後ろを追いかけてくるっていうのです。神様の恵みが、いつくしみが追いかけてくる。人生を歩めば歩むほど、恵みがついてくる、追いかけてくるのです。最後はどうなるのでしょうか。最後は恵みに飲み込まれるのです。死に飲まれるのではなくて、いのちに飲まれるのです。いのちの神に包まれるのです。

“敵”という言葉がさっき出てきました。新約聖書の第一コリント 15 章、復活の章と言われるこの章に“最後の敵”という言葉が出てきます。15 章の 26 節。人間は生きている間いろんな敵と出会います。そしてその敵と戦って勝利したり逃れたり、色々して生き延びる。でも最後の敵が待っているって言うのです。最後の敵は死だと言うのです。でも聖書はこう宣言しています。「最後の敵である死も滅ぼされる」。最後の敵として滅ぼされるのは、死です。死は最後の敵として滅ぼされる。私たちが世を去るとき、世を去って神のもとに行くとき、いのちの神に包まれるのです。「いつまでも」とダビデは歌いました。いつまでも、ずっとずっと、いつまでも住む家があります。それはこの世の家ではありません。地上の家は大切です。でもそれだけじゃありません。この世の家ではない、この世の家は有限です。でも、いつまでも住む家があるのだ。ダビデの歌によって私たちは教えられます。この世の家ではない住まいがある。私たちのたましいが住む家っていうのは、今はこの体を住処としていますけれども、この体がいつまでも続きたましいの住処ではありません。この肉体ではない、この肉体も有限です。いつまでも住む家があるのです。いつまでも続くいのちがあります。いつか止まるいのちではありません。終わらないいのちの祝福がここにあります。終わらないいのちの希望があります。「だから私は恐れな

い」。ダビデとともに歌うことができます。安心して今日、明日を生きることができます。ダビデは、「私はいつまでも主の家に住みます」と歌いました。神様が言われます。「いつまでもわたしと共に住みなさい。いつまでもわたしと一緒に生きなさい」。私たちの羊飼いがおられます。安心して信頼できる方です。お任せできる羊飼いがいます。その方を「わが羊飼い」とあなたも呼ぶことができるのです。

## V 祈り

お祈りをささげましょう。

天の父なる神様。私たちの造り主、すべてのいのちを創り支えてくださる神様。今日の日を感謝します。今日は私たちの人生の先輩に、また父親、母親、祖父母、私たちの家族や先祖に感謝敬意を表す日です。神様、今日ここに、場所は色々ですけれども、一緒にこの礼拝に参加した一人一人と、そして敬老の招待者である一人一人、人生の先輩である一人一人に、感謝を表し、敬意を表し、そして祝福を祈ります。神様、あなたがいのちの言葉によって語ってください。「わたしがいる」と言ってください。「いつまでもわたしとともに生きなさい」と言われます。造り主、救い主、いのちの主を信じて信頼して、希望を持って歩めますように。集まることができない時にも、神様が一人一人を見守り、ご家族と共に守り続けてくださいますように。私たちを一つとし、お互いを結びつけてくださいますように。真実なる主の豊かな祝福がありますように。主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。